

## (1. 書評論文)

### 1-1. 「ひきこもり」当事者の自己呈示とアイデンティティをめぐる問題

関水徹平 『「ひきこもり」経験の社会学』  
(左右社、2016)

澤田 有希

#### 1 はじめに

##### 1.1 評者の問題関心

「ひきこもり」とは、1990年代頃に不登校の文脈から分化する形で問題化された、「おおむね自宅を中心とした生活を送り、他者とのコミュニケーションをあまりとらない」人々のことを指している。そして、評者自身もそのような「ひきこもり」経験を持つ女性当事者である。小、中学校と不登校を経験し、高校も中退し、自宅と病院を行き来するような日々が約7年続いた。なんとか進学した通信制大学在学中に、関水徹平（以下、著者）による『「ひきこもり」経験の社会学』（以下、本書）に出会って感銘を受け、自らの研究テーマを「ひきこもり」に決めることにした。

評者は「ひきこもり」問題の中でも、特に“女性の”ひきこもりに焦点を当てて、それをジェンダーの視点から考察することを目指している。従来の調査などではその約7～8割を男性が占めると言われてきたが、「ひきこもり女子会」<sup>1)</sup>などと銘打った女性限定の居場所が設定されると、想定より多くの女性当事者が参加することから、その潜在数は大きいと考えられ始めている。また、内閣府による調査では家で主に家事に従事する者が定義から外されるなど、女性のひきこもりはこれまで不可視化・周縁化されてきたと言える。本稿は、そのような当事者として「ひきこもり」について研究する立場から、本書が当事者の経験およびひきこもり研究においてどのような意義や限界を持つかを批判的に論じていく。

##### 1.2 本書の位置づけ

本書の特徴は、就労支援や人間関係について他人の設定するゴールよりも、本人が実存的問いに向き合うプロセスの重要性を主張する点である。これは、2007年に出版された、石川良子『ひきこもりのゴール——〈就労〉でもなく〈対人関係〉でもなく』を批判的に受け継ぐ立場にある。

1) 一般社団法人ひきこもり UX 会議が全国各地で開催する「ひきこもり UX 女子会」（不定期開催）（<http://blog.livedoor.jp/uxkaigi/archives/1077716668.html#more>）や、宝塚発達心理ラボによる「大人のひきこもり女子会」（隔月）（<https://www.takarazuka-lab.org/?cat=4>）など。

石川は、「ひきこもり当事者」のライフストーリーに焦点を当て、「ひきこもり」状態に置かれた者は「自己を語るための語彙の喪失」状態、つまり、自分が何者であるかを定義することができず、他者に向けても自分が何者なのかを語るができない状態に置かれていると分析する（石川 2007）。そして当事者は、「居場所」などにおいて「ひきこもり」という言葉を引き受けることによって、自らを語るための語彙、つまり自らを位置づける「肩書き」を獲得し、支援団体につながるなど、「ひきこもり」状態からの脱出の糸口をつかんでいると主張する。そしてその上で、「ひきこもり」という、それまでのルーティーンの破綻によって立ち現れた、A. Giddens の言う〈実存的疑問〉（Giddens 1991=2005）に対峙する当事者の姿を描いている。書名にもなっているように、石川にとって「ひきこもり」の〈ゴール〉——つまり〈回復〉——とは、就労や対人関係の獲得ではなく、「存在論的安心の確保」すなわち「生きることへの覚悟、生きることや働くことの意味といったものを手にすること」だという（石川 2007: 229）。

著者は、石川の立場を継承、精緻化させ、また石川と同様に「ひきこもり」経験者（以下、経験者）へのインタビューを用いたアプローチを採る。この意味で本書は、石川への批評という側面を持つ。具体的には、石川論文では本人の〈実存的疑問〉が詳細に描写されていたものの、その背景にある日本社会の構造については一般的な記述に留まっていた。この点に関して著者は、以下に見るように本人の抱える実存的な問いとそれを膠着させる社会構造の関係を精緻に記述したと言える。

著者は、経験者にとって「自分の〈問い〉」に取り組むこと、つまり、多数派への懐疑やオルタナティブな生き方を問い、語ることが必要でありながら、それを容易にはできない状況があり、適応しろという「他人の〈問い〉」に追い詰められて耐えがたい苦しみを経験するさまを描き出した。そして、その背景には戦後日本の構造、すなわち家族福祉レジームや男性稼ぎ主モデル、そして多数派による「同化主義」があることを示した。荻野達史（2018）も言及するように、「ひきこもり」という経験を日本社会の歴史的状況に位置づけて見せたことが本書の最も評価できる点である。さらに、E. Goffman、E. H. Erikson、Giddens、A. W. Frank などの議論を応用した理論的考察を行うことで、「ひきこもり」を多角的に捉えた研究となっている。加えて、本書は「ひきこもり」問題の現在の見取り図を提供してくれる点で役立つだけでなく、経験者の〈回復〉への語りが丁寧に紹介・考察されている点から、当事者が読んでもエンパワメントになる部分が大いと言えらるだろう。

本稿は2章で本書の内容を概観したのち、評者自身による当事者研究者としての研究結果と異なる内容が論じられている第3章を詳しく述べた上で、第4章でこれへの反論を提示する。

## 2 本書の内容

### 2.1 本書の問い

本書全体の大きな問いは、ふたつである。

第一に、経験者自身にとって「ひきこもり」とはどのような経験なのか。ここで経験者とは、「ひきこもり」状態を経験している（した）と自己定義する人のことで、鬱病や発達障害などの有無を問わず、自らの経験を「ひきこもり」として定義し、語ることを選んだ人々を指す。このことから、各人の語る「ひきこもり」経験も多様である。この問いは、経験者へのインタビュー調査や自伝的著作などのデータに基づいて考察される。

第二に、経験者以外の人々、とりわけ家族や行政にとって「ひきこもり」とは何か。この点は、家族、精神科医、支援者、行政などの「ひきこもり」についての語りや、家族会による会員調査などのデータに基づいて考察される。結論を先取りして言えば、家族や周囲の人々にとって「ひきこもり」は解決すべき「問題」である一方、本人たちは必ずしもそれを解決すべき「問題」とは捉えていない点が重要である。

本書の構成は、序章、第1～4章と補論Ⅰ～Ⅳ、そして終章だ。上で見た問いのうち、第1章、補論Ⅰ、第3章、補論Ⅲ、第4章、補論Ⅳが第一の問い、第2章と補論Ⅱが第二の問い、そして終章ではその両方への回答を与えている。以下にその構成を追いながら各章での方法と論点を確認していくが、本稿の構成上、第3章については節を改めて紹介する。

## 2.2 経験者にとって「ひきこもり」とはどのような経験か

まず第1章と補論Ⅰでは、第一の問いが扱われている。

第1章「「ひきこもり」経験と〈問い〉」では経験者のインタビューや自伝を手がかりに、「ひきこもり」経験における〈問い〉とは何かを明らかにする。その〈問い〉には、「なぜ働かないのか？」というように、社会に「不適応な自分」を詰問し、適応すべしという〈答え〉と表裏一体の、いわば「他人の〈問い〉」がある（本書：17）。他方、その〈問い〉それ自体を問い直そうとする「自分の〈問い〉」がある。それは、「間違っているのは自分ではなく、周囲のほうではないか」というように、「不適応な自分」を一旦引き受けた上で「他人の〈問い〉」を問い直そうとするものである（本書：39）。しかし、社会において支配的な「他人の〈問い〉」は本人を自責に追い込んで、両義的な葛藤を抱かせることになる。

これに対して著者は、経験者が様々な人の生き方や言葉に触れながら「自分の〈問い〉」に何とか言葉を与え、それを他者に見られ、聞かれるものにしようとする試みを検討することで、期待される生き方へのやみくもな適応を目指すのではなく、自分なりの社会との適応の仕方を模索することで「自分の問い」に根差した生き方を目指すことを提唱する（本書：66）。

補論Ⅰ「カテゴリー化と主体化——「ひきこもり」経験者になること」では、石川における「ひきこもり」カテゴリーの引き受けについて検討する（石川 2007）。石川が着目するのは、専門家言説である「ひきこもり」カテゴリーの引き受けによって「『私』の経験」が「『私たち』の経験」になり、それを自ら引き受けることで経験者の集まる自助グループなどに参与するようになる過程である。この意味で「ひきこもり」は「自己を語るための語彙」であり、「ひきこもり」という自己定義は「コミュニティへの参与」の条件である（石川 2007：116-8, 122-3）。著者はこのような議論を踏まえて、「ひきこもり」カテゴリーとの出会いと引き受け

に注目し、石川が観察したような専門家による定義とは異なる、経験者たちによる独自の主観的用法と、石川が見落としていた「ひきこもり」という「自己を語るための語彙」を選択する過程に着目して、経験者の語りを分析する。そこから、彼ら彼女らは「ひきこもり」という「自己を語るための語彙」をそれぞれ専門言説から外れて独自の方法で意味づけていることがわかる。I. Hacking が論じたように、経験者たちは「単に専門家たちによって名づけられ、分類され、研究される対象ではなく、自分たちこそが自分たちについての知識を生み出す立場なのだ」と主張するようになると言える。こうした「自己帰属的カテゴリー」(Hacking 1996: 380-2) の実践を踏まえ、著者は経験者にとってカテゴリーの引き受けとは、他者によるカテゴリーの意味づけ(客観的意味)を部分的には拒み、改めて自分自身によって解釈しなおす(主観的意味連関に組み込む)過程であるとする(本書: 99-101)。

### 2.3 経験者以外にとって「ひきこもり」とは何か

続く第2章、補論Ⅱは、上の第二の問いを扱うものだ。

第2章「戦後日本と「ひきこもり」問題——生活保障という視角から」では、なぜ周囲は「ひきこもり」状態にある本人に〈問い〉を突きつけるのかを理解するために、家族にとって「ひきこもり」がどのような経験かを明らかにする。家族は家族成員の「ひきこもり」問題を経験者本人の「生活保障」をめぐる不安として経験するが、生活保障の主体は家族だけではない(本書: 113-4)。そこで著者は、人々の生活保障を、市場・政府・家族という三つの社会制度から捉える分析枠組み<sup>2)</sup>から、これまで家族が生活保障の主体として大きな責任を担い続けてきた日本社会のあり方が、男性稼ぎ主モデルに基づく「家族主義」的な生活保障であることを確認する。そして「ひきこもり」事例が家族にとって生活保障の問題として経験されるのは、家族以外に生活保障の責任を担う社会制度が不在だからである(本書: 152-3)。本章が明らかにしたのは、経験者の問いのうち「他人の〈問い〉」「なぜ働かないのか」に当たるものが発される前提が、家族福祉レジームにあるということなのである。

補論Ⅱ「「ひきこもり」の語られ方——問題理解の枠組みに着目して」では、本人や家族以外の人々が「ひきこもり」について語る際に用いる「問題理解の枠組み」を、これまで蓄積されてきた「ひきこもり」についての語りを分析することによって明らかにする。紙幅の関係から簡潔にしか触れられないが、1990年代に「不登校」の延長として問題化された「ひきこもり」は、2010年代において、「就労支援」と「精神保健福祉」というふたつの文脈がその支援の主流として確立された。ただし2010年代後半、「生活困窮者自立支援制度」の文脈で「ひきこもり」がむしろ「貧困」の問題だと位置づけられてもいる。

2) ここで参照されているのが G. Esping-Andersen の福祉レジーム論である。市場は、労働の商品化という形で賃金を受け取り、これが生活保障を担う極めて重要な福祉リソースとなる。これに対して政府は、労働力の商品化が困難な状況において、脱商品化という形で、貨幣や財やサービスの分配を行う。家族は、メンバーシップに基づく衣食住といった財や心身のケアのためのサービスの提供といった形で前商品化による生活保障を行う。(Esping-Andersen 1999 = 2000)

## 2.4 再び、経験者にとって「ひきこもり」とはどのような経験か

続く補論Ⅲ、第4章、そして補論Ⅳは、再び第一の問いへの答えである。

補論Ⅲ「「ひきこもり」支援を考える——主観的 QOL を軸にした支援」ではここまでの議論を踏まえて、「ひきこもり」支援の現状を確認するとともに、経験者の語りに基づいて望ましい支援のあり方を考察する。著者は、客観的 QOL (quality of life) に基づいた行政の就労・就学支援ではなく、本人の主観的 QOL を軸にして、あらかじめ特定のゴールを決めず、「どのような支援が望ましいのか」を、支援者が本人と長期的にわたってともに考える支援関係が望ましいと主張する (本書：294)。

第4章「私」たちの人生の物語——語りの難破と語りの再構築」では、経験者の時間的展望についての語りを取り上げ、それを物語論の視点から分析することで、そこでなぜ「時間の流れなさ」といった感覚が生じるのかを明らかにするとともに、そうした「時間の流れなさ」から抜け出す方策を考察する。経験者における「時間の流れなさ」とは、石川が Giddens の自己アイデンティティ論を参照しながら「「未来」の感覚」<sup>3)</sup>を抱くことが彼ら彼女らの一つの到達点として位置づけた際に、その欠如として示されたものである。事実、ある経験者は「まさにここがもう断崖絶壁で、目の前がもう真っ暗闇。ブラックホールみたいになっちゃってるから、一步もどっちに進んでいいかわからない感覚。スパンって道が…。」(本書：307) というように、彼ら彼女らは時間を「未来」を持たない「いま」の連続として捉えており、「未来」を「暗闇」と語る。

著者は、「語り(物語)の難破 (narrative wreck)」(Frank 1995=2002: 84; Dworkin 1993=1998: 34) という概念を応用してこの状態を捉える。それは、「いま」の現実の経験が過去・現在・未来という時間上に組織化する筋書きとはそぐわないものとなることで、導かれるはずの「未来」も展望できなくなってしまう状態を意味する。そして「ひきこもり」経験において「いま」がそこから「難破」する物語とは、高度経済成長期以降規範的なライフコースとなった「学校を出て働く」という物語であると指摘する (本書：311)。

そして、経験者が「語りの難破」から抜け出す道として著者は、「いま」をもとのストーリーライン上に戻そうとするのではなく、筋書きを失った「混沌の語り」<sup>4)</sup>に耳を傾けることを提唱する。その過程で「回復の語り」<sup>5)</sup>を見つけ出す場合もあれば、全くオルタナティブな人生の物語を作り出す場合もありうる。後者には例えば、「学校を出て働く」という自明視されたライフコースを見つめ直したり、あるいは自らの「死」をイメージすることで、“みんな”と同じようにはできない「私」の固有性を認識し、自らの人生を引き受け直すといったものがある (本書：326-8)。

3) 「どういった形であれ生き続けている自分を想像できるようになること」という展望 (石川 2007: 216-7)。

4) 経験の渦中にある人の多くにとって、人生の物語は筋書きを失い、混沌に陥っており、その語りは物語化されない「混沌の語り」である (Frank 1995=2002: 139-41)。

5) ストーリーラインから逸脱してしまった「いま」のほうを軌道修正し、元の人生の物語の筋書きに位置づけ直そうとすると、その人は「回復の語り」の語り手になる (Frank 1995=2002: 114-6)。

補論Ⅳ「「生きることへの意思」再考——実践意識と言説意識の区別から」では、経験者が「自分の生を肯定し、納得する」プロセスを「実存的疑問」に向き合って「内省」する、あるいは「内面を掘り下げ」る過程として捉える石川の議論（石川 2007: 29, 32, 第 8 章）に対して疑問を提示し、「生きることへの意思」を得るプロセスを経験者へのインタビューをもとに再考する。石川は、「「未来の」感覚」とは「存在論的安心」に基づくルーティーン感覚だとする Giddens の見解（Giddens 1991=2005）をふまえ、経験者が存在論的安心を回復するために「真正面から〈実存的疑問〉に取り組むというアプローチ」（石川 2007: 224）、すなわち「どうすれば納得いく形で生きていけるのかを考え抜く」「内面での作業」（石川 2007: 29）が重要なのだと主張する。つまり、「自分の経験や思いを言語化する」ことで、経験者は「実存的疑問」に答えを出すことができるのだと（石川 2007: 230）。

これに対し著者は、Giddens 自身は「実存在的问题」を言説意識ではなく実践意識の水準における問題と位置づけているにも関わらず、石川の議論は両者を取り違えていると批判する（本書: 340）。Giddens の実存在的问题とは「存在論的安心」、つまり自分自身や他者への根底的な不信等を括弧に入れることで成り立つ、日常生活の一貫性についての感覚であり、重要な他者たちとの幼少期の関わりにおいて形成される感覚（Giddens 1991=2005: 39-41）が脅かされることである。同様に、実存在的问题に「答える」とは、言語化する能力とは別の、言語化されないいわば暗黙知の水準で、他者とともに生きていくことに納得を得ることなのだ。つまり、少なくともギデنزの言う実存在的问题に「答え」を持つとは、「なぜ生きているのか」と問いを言語化し、さらにその問いに言説意識の水準で回答を与えることではないし、そもそも言説意識の水準で「答え」を与えうような性質の問いではない。そうではなく、「実存在的问题」に無意識や実践意識のレベルで「答え」をすでに持っていることで存在論的安心は維持されるというのが、唯一我々に言えることなのだと著者は主張する（本書: 341）。そのためには、あらゆる行為が試行錯誤を通じてできるようになるのと同じように、実践意識の水準で様々な出来事に対処できるようになることで、実存在的问题を潜在化し、存在論的安心を維持するしかないのである。

しかし、経験者に特徴的なのは、真面目に聞いても人の言うことが理解できないなど、周りの人が当たり前に行っていることに「慣れ」ることができなかった経験である。さらに、実践意識の水準で慣れることができること、できないことは人によって多様であり、いつまでも慣れないこともある。したがって、石川の言う「自分の生を肯定し、納得すること」に至るプロセスは、言語水準の取り組みだけに還元できるものではなく、実践意識の取り組みとの両方が必要とされると著者は結論づける（本書: 347）。

## 2.5 経験者と、それ以外の人々にとって「ひきこもり」とはどのような経験か

終章「「社会」を見いだす——同化主義を越えて」は、第一の問いと第二の問いの両方への答えである。

ここでは人の価値観、考え方、生き方などについてかくあるべきという基準を設け、その基

準に同化することをよしとする考え方を「同化主義」と呼び、「ひきこもり」経験との関係が考察される。著者はまず、経験者たちの多くは少なくとも最初は「多数派のあり方への同化主義」に囚われており、そこから逸脱する自分を否定せざるをえない原因を次のように説明する。多数派のあり方に同調することを自分にも他人にも強要してきた戦後の日本社会では、支援の名の下に経験者を多数派に戻す発想が支配的である。そして社会は、そのあり方に同化できない経験者に絶望や葛藤をもたらすのだ。つまり、経験者の葛藤とは、戦後日本社会が形成した多数派の生き方——男性稼ぎ主モデルの近代家族を形成するというライフコース——と、それを基準とする強力な同化主義から生まれた、戦後日本社会の産物であると著者は明言する（本書：358-9）。そして多数派の中にも、同化主義を深く内面化し多数派の側にいるべく努力を払う者もいれば、経験者の一部のように葛藤の末に多数派には同調できない少数派としての自分に自覚的に立脚して生きていく人々もいる。前者にとっては後者が「わがまま」のように映り、結果的に自分が受けている抑圧を他者にも押しつけてしまうことがあり、そのことが社会の「ひきこもり」への不寛容なまなざしにつながっているとする。

## 2.6 本書全体の答え

最終的に、著者は本書の問いに以下のような答えを出している。第一の問い、「経験者にとって「ひきこもり」とはどのような経験か」に対してはまず、社会に適応すべしという答えの貼りついた「他人の〈問い〉」と、自分にも一理あるはずだという「自分の〈問い〉」の間で板挟みになりながら、後者に言葉を与えようとする経験であると言える（第1章）。そのような過程で、経験者は「ひきこもり」というカテゴリーを、専門言説を引き写すのではなく自ら積極的に受け入れていくと考察する（補論Ⅰ）。また、ひきこもり支援を考える際には、就学や就労などのゴールを設定せずに、本人の主観的 QOL を考慮した支援関係が求められるとする（補論Ⅲ）。さらに、想定していたライフコースを辿れなくなる「語りの難破」から、物語化できない「混沌の語り」を語る中で、元のライフコースに戻ることもあれば、全くオルタナティブな人生の物語を作り出すこともあることを示す（第4章）。加えて、経験者を脅かす「実存的問題」に取り組むために、言説意識と実践意識の両方の水準が重要であると分析した（補論Ⅳ）。

次に第二の問い、「家族や行政にとって「ひきこもり」とは何か」についてはまず、「ひきこもり」が家族にとって生活保障問題として立ち現れてくると主張する。現代日本の福祉制度は家族主義であるため、他の制度に頼ることができず家族だけにその負荷が過重にかかると分析する（第2章）。また、ひきこもりは当初精神保健福祉の対象として見られ、その後就労支援の対象とされ、現在は貧困問題としても捉えられていることを見た（補論Ⅱ）。

これらを踏まえて著者は、最後に、両方の問いに答える「同化主義」という考え方を挙げる。日本社会は多数派への同化主義に覆われており——これはひきこもりに限ったことではないが——そこから逸脱する者を排除しようとする。この同化主義は経験者にも内面化されているため、多数派のように適応できない自分を責めるが、その過程の中で少数派である自分に立

脚し、人生を引き受け直して生きていく者もいる。同化主義のために無理な努力をしている多数派もいるはずであり、乗り越えられるべきは社会の同化主義それ自体であると主張される(終章)。

### 3 第3章 状況と自己アイデンティティ

上記で見たような関水の議論は、おおむね妥当であるように思える。特に、「他人の〈問い〉」に追い詰められる「自分の〈問い〉」という点には深く納得させられる。

他方で疑問点もある。それは、第3章「状況と自己アイデンティティ——「参加」の困難さをめぐって」で論じられる、ゴフマンの「状況的自己の提示」という概念をめぐる経験者の受け止め方についてである。この点については評者による調査(4.1 参照)では異なった結果が得られた。以下ではまず、著者の議論を追っていきたい。

#### 3.1 Erikson の自己アイデンティティ論

著者は、経験者はなぜ人との関わりを回避するのかという問いに対して、Erikson の自己アイデンティティ論と、Goffman の相互行為論を枠組みとして分析をすることで答える。前者に沿った斉一性と連続性を含む自己アイデンティティと、後者から導かれる状況的自己は、一方をとれば他方が達成できないという円環的關係にあることを示しながらも、まずは前者の感覚が重要であり、その上で後者が要請されることを説明し、関わりを回避する経験者に実践的な示唆を与える。

著者は第一に、Erikson の自己アイデンティティ論から「ひきこもり」経験の心理的側面を分析する(本書:253)。Erikson は、青年の能動的な自己アイデンティティ形成において、他者が「そのような彼」としてそのまま認めるという「相互性」に基づいて承認されることが極めて重要であると考えている。なぜならば、こうした過程を通じて、他者との間での自己像の「斉一性」の感覚とともに過去の自己から将来の自己への「連続性」の感覚を得ることができるからだ。

他方で、周囲の他者、とりわけ重要な他者から自己像をめぐる承認が与えられなければ、自己アイデンティティは形成されえず、他者と自己への基本的不信を形成し、「アイデンティティ・クライシス」に陥る。アイデンティティ・クライシスとは、自己像をめぐる「相互性」の想定に亀裂が入り、自己像の相互性が崩れ、自己が他者によってどのようにみなされるかが不透明になり、他者の眼前に身をさらすこと自体が、自己をめぐる斉一性と連続性の不成立を突きつけられるという経験である。

こうした枠組みに基づいて、著者は、多くの経験者に共有された、他者による受容や承認の欠如——むしろ拒絶と否認——といった経験に言及しており、「自分は周囲の世界には受け入れられない」という認識と、上述の意味でのアイデンティティ・クライシスの経験との整合性を指摘する。そして、経験者が人との対面的な相互作用から撤退し、ひきこもるという行為を



選択するのは、自己像への期待をめぐる断絶が想定されるような他者との関わりを避けるからだと説明する（本書：256-8）。

しかし、対人関係からひきこもることによって自己像をめぐる不連続性が解消されるわけではない。むしろひきこもっているという状態を親などの重要な他者たちに責め立てられることで、経験者はかえって重要な他者たちとの間に不連続性を積み上げていく「悪循環」に陥る。人と関わることは自分が傷つけられる経験であり、自分を守るためには人との関わりを回避せざるをえないが、ひきこもっているかぎり周囲の人々からの受容や承認を得ることは難しいというジレンマがここに存在する（本書：257）。

### 3.2 Goffman の相互行為論

第二に、Goffman の相互行為論を参照して、状況の側から「ひきこもり」経験の分析が行われる（本書：260）。つまり、そこで問われるのは、経験者が困難を感じ、結果的に人との関わりを回避するに至るような状況のあり方のほうだ。まず Goffman は、状況に参加する行為者が、自己と他者を類型化することで、状況の秩序化（＝状況の定義）を達成していることに注目する。その際の認知的枠組みを Goffman は、「人－役割図式」と定式化し、状況における行為者が「役割」としてだけでなく、同時に役割を越えた「人」としても認知されていることを指摘する（『フレーム分析』）。ここでいう「人」とは役割を演じるプレイヤーであり、いわば役割に対するメタ役割、「相互行為者としての役割」（Goffman 1967＝2002：118）である。そして、状況の参加者たちは、状況の中で人を認知するために利用可能な手がかりとして互いの役割遂行を拾い集め、適切な形で統合された存在として他者、そして自分自身を「人－役割図式」に則って類型化するのである。結局のところ、このような類型化を通じて、参加者が、お互いにあくまで状況の中で、状況の秩序化の要請に基づいて構成される「状況的自己」になることができるかどうか、状況の参加にとって重要なのである。

著者は、こうした Goffman の議論を「ひきこもり」経験に当てはめ、経験者にとっての状況への参加の困難が、適切な「人－役割図式」の認知および状況の定義の達成という観点から説明できると主張する。つまり、それらが達成される可能性が高ければ参加は容易であり、そうでない可能性がある状況では参加をためらう。なぜなら、状況の定義がうまくなされない事態は、行為者に「不安」「当惑」「狼狽」を経験させるからだ（Goffman 1967＝2002：107；本書：265-6）。

この点について著者は、状況の定義のあり方次第で、経験者にとって状況の参加がいとも容易くなることを、上山和樹の語りの中から見出している。上山は、阪神淡路大震災の際、「被災」を契機として「『日常』が壊れ」、つまり状況の定義が変化したことで参加が容易になったと振り返っている<sup>6)</sup>（本書：267-9）。

一方で、状況の定義が変化しない場合でも、状況の定義にふさわしい自他の類型化の仕方を

6) 上山和樹ブログ「Freezing Point」2006年1月17日の記事より（<https://technique.hateblo.jp/entry/20060117/p2>）（2020年8月10日取得）

学習し、自己呈示の仕方を変えることで、状況への参加が容易になることも指摘されている（本書：269）。そこで取り上げられるのが経験者 B さんの事例である。20 代半ばに 2 年ほどの「ひきこもり」状態を経験したのち「ひきこもり」支援団体とのつながりを持ち、交友関係を広げていった B さんは、友人に誘われて初対面の人たちとの食事に連れていかれるが、そこではその友人が「はい、B ちゃん、ひきこもり」というふうで紹介してしまう。最初は当惑したが、回を重ねるごとに「みんな、ご飯を食べに来てせっかくしゃべりたいんだから」という状況の定義を「学習」し、状況の定義に見合ったコンパクトな自己呈示——「あー。まあ、そんな時期もありました」というような——の仕方を身に付けていった。著者はこの事例を、他者の反応（「何こいつ、気持ち悪い」）を認知して、相互行為の進行を妨げないような振る舞いを学習し、状況の秩序化に沿った「人－役割」の認知と状況の構成を達成した過程と捉えている。

### 3.3 自己アイデンティティと状況的自己

こうした知見を通じて、著者は第一の心理的分析で用いた Erikson の自己アイデンティティ論と、第二の状況の分析で用いた Goffman の相互行為論の知見の双方を突きあわせて検討する。というのも、Goffman の相互行為論から、状況的自己の構成の方法を学習することがひとつの「回答」として提示されたかに見えたが、このような仕方では生み出される状況的自己は円滑な参加を達成するために表面を取り繕えるかどうかを問うものに過ぎず、このような表面的な自己を相互行為においていくら積み重ねても、Erikson 的な自己アイデンティティの内的一貫性の感覚にはたどり着けないように思われるからだ（本書：272）。

他方で、仮に状況の定義に無関連な全体的な自己アイデンティティにこだわるという Erikson 流の「回答」とをとるとしたら、それは状況における適切な「関与の義務」への侵害を引き起こし、その人を「欠陥ある人」（Goffman 1967=2002：138）にしてしまうと著者は述べる。つまり、個々の状況を越えて成り立つ自己アイデンティティという想定自体が、かえって参加の困難を生じさせかねないのだ（本書：273-4）。

ここで著者は、経験者の多くは自己アイデンティティ論の枠組みに沿った語りをしており、状況的自己を越えた自己アイデンティティの感覚が求められているという点に立ち戻り、次のように主張する。つまり、状況的自己を位置づけることができるようになるためには、まず「断片的ではない自己」が必要であるというのだ（本書：275）。それは、さまざまな状況における状況的自己を拾い集めた結果として、より統合的な「様々な状況に参加できる自己」、すなわち状況的自己を超えた「統合的な自己」という自己類型を形成することによって達成することができる。統合的な自己それ自体はいかなる状況にも現れない自己像であり、自我にとってはいわば「虚焦点としての自己」である。これは自我にとっての虚焦点——実際の状況の中には存在しない焦点——だからこそ、それに対して状況的自己を「断片」として位置づけることが可能になり、状況的自己が笑いのものになっても自分の精神はむしろまよわることがないのである（本書：276）。

その上で著者は、実践的な示唆として、状況に参加するために自分を鍛錬したり、抽象的な「社会参加」について考えるのではなく、具体的にどのような状況であれば参加できそう、したいのかを冷静に考え、参加できそうな状況には参加してみるという試行を繰り返すことを提案する（本書：278）。そこでもし「当惑」を感じたならば、そこには「当惑」を感じさせる状況の定義が作り出されているに過ぎない。そのような状況の秩序化の営みを詳細に考察・理解することで、参加できる状況が増えていくだろうと著者は言う。

#### 4 本書に対する批判と展望

##### 4.1 第3章に対する批判

しかし、「統合的自己」に基礎づけられた「状況的自己」を提示する、という著者の示す方向性は、本当に当事者にとって解決となるのだろうか。

評者は卒業論文において、「女性のひきこもり」をテーマに自身を含むひきこもり女性当事者4人を対象としてインタビュー調査を行った。そして、本書の第3章の自己呈示とアイデンティティをめぐる問題について著者と対立する結果を得た。

調査した4人の当事者は皆、その場その場で周りに求められる状況的自己を“演じる”ことができてしまうのだが、すべての当事者が Erikson 的な統合的自己をしんどさ・苦手なことを抱えた「本当の自分」として持っているため、それを隠して状況的自己を呈示することへの偽りの意識や徒労感の間で引き裂かれた結果、対人場面から撤退してしまうという構図が共通して見て取れた。状況的自己を呈示することは、しんどさを抱えた「本当の自分」を守るための一次的な自己防衛なのだが、その姿も承認を得られず、疲れきってしまって、さらに二次的な自己防衛としてひきこもってしまうのだ。すなわち、著者が勧めるような状況的自己の呈示は、彼女らにとってはひきこもる要因だったということである。彼女らは状況的自己を「作った偽りの私」「取り繕った自分」というふう呼び、しんどさを抱えた、他の人と同じようにいろいろなことができない「本当の自分」——全体的な自己アイデンティティ——と対比させて語っていた。つまり、彼女たちの自己は「偽り」と「本当」の二元的なものなのである。

ちなみに、対象者の4人中3人に発達障害の傾向が見られたのだが、社会的コミュニケーションが苦手とされる発達障害当事者について、それが女性であれば“空気を読み”カムフラージュすることができると言われている（Meng-Chuan et al. 2016）。つまり、女性というジェンダーに、「自分が周りからどのように見られているか」を察知しやすい傾向（他者の内面化）が付随しているのだ。そのことから、女性ならば状況的自己を提示すること自体は比較的容易にできてしまうのだと考えられる。このようなことを踏まえると、著者の提案は、すでに空気を読みすぎるくらい読めてしまう彼女たちに、「とにかく空気を読め」と迫るものに聞こえてしまう。

彼女たちがどのようにこの問題乗り越えたかという、自助グループのような場で初めて「本当の自分」を呈示して受け入れられたという感覚を得るといような、承認の経験を積み

重ねていくことだった。著者の言うように状況的自己を呈示する回数を重ねるだけではおそらく余計にひきこもってしまうだろうが、しんどさと共にある統合的な「本当の自分」を呈示し承認されることが自分の人生を引き受け、生きていく上で不可欠であることがわかった。

## 4.2 「女性の当事者研究者」としての批判と展望

この他にも、女性の当事者研究者という視点から本書を読むと、次のような批判点が見えてくる。第一に、ジェンダーを分析視角にする評者の立場からすると、本書でインタビューを行った協力者のうち男性が7人なのに対し女性は3人とほぼ倍の差があり、語られた内容や分析の視角についても、ジェンダー的な視点が抜け落ちていることが指摘できる。さらに、世の中で主流のライフコースや「同化主義」に関しては、性別によって求められる内容が違うと考えられる（女性ならば働くことと、結婚して主婦になり家事・子育てをすることの両方が求められるというように）。また、「主婦のひきこもり」<sup>7)</sup>と言われる人々も近年注目されてきている。そのような中で、ジェンダーへの配慮なしにひとくちに「ひきこもり」経験者と言うことは難しいだろう。

第二に、インタビュー協力者が「ひきこもり」をある点で克服したと考え、それをうまく言語化できる“経験者”たちであり、問題のただ中にいる当事者の混沌とした語りとはかけ離れたものだと指摘せざるをえない。

本書の成果を踏まえ、今後の「当事者の実存的な問い」を焦点化したひきこもり研究は、ジェンダーやセクシュアリティ、障害の有無など、さまざまな差異を抱えた複雑な状況を生きる当事者のリアリティに迫っていく必要があると考える。

### 【参考文献】

- Dworkin, R. M., 1994, *Life's Dominion: An Argument About Abortion, Euthanasia, and Individual Freedom*, New York: Vintage Books. (水谷英夫・小島妙子訳, 1998, 『ライフズ・ドミニオン——中絶と尊厳死そして個人の自由』信山社出版.)
- Erikson, E. H., *Identity: Youth and Crisis*, New York: W. W. Norton & Company, Inc. (岩瀬庸理訳, 1982, 『アイデンティティ——青年と危機』金沢文庫.)
- Esping-Andersen, G., 1990, *The Three World of Welfare Capitalism*, Princeton: Princeton University Press. (岡沢憲美・宮本太郎監訳, 2001, 『福祉資本主義の三つの世界——比較福祉国家の理論と動態』ミネルヴァ書房.)
- Frank, A. W., 1995, *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*, Chicago: The University of Chicago Press. (鈴木智之訳, 2002, 『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- Giddens, A., 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge: Polity Press. (秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 2005, 『モダニティと自己アイデンティティ——後期近代における自己と社会』ハーベスト社.)
- Goffman, E., *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*, New York: Doubleday Anchor. (浅野敏夫

7) 専業主婦だが家族以外と交流がなく、不全感を抱える女性のこと。近年さまざまなメディアが取材をしている。

- 訳, 2002, 『儀礼としての相互行為』法政大学出版局.)
- , 1974, *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*, Boston: Northeastern University Press.
- Hacking, I., 1996, “The Looping Effects of Human Kinds,” in D. Sperber, D. Premack, and A. J. Premack, eds., *Causal Cognition: A multi-disciplinary Debate*, Oxford: Oxford University Press: 351-83.
- 石川良子, 2007, 『ひきこもりの〈ゴール〉——「就労」でもなく「対人関係」でもなく』青弓社.
- 伊藤康貴, 2016, 『「ひきこもり当事者」の社会学的研究——主体から問う「ひきこもり」と社会』関西学院大学大学院 2016 年度博士論文.
- Lai, Meng-Chuan, Michael V. Lombardo, Amber, N. V. Ruifrok, Bhismadev Chakrabarti, Bonnie Auyeung, Peter Szatmari, Francesca Happé, Simon Baron-Cohen and MRC AIMS Consortium, 2016, “Quantifying and Exploring Camouflaging in Men and Women with Autism,” *Autism*, 21 (6) : 690-702.
- 荻野達史, 2018, 「関水徹平著『「ひきこもり」経験の社会学 (左右社、2016 年)』『保健医療社会学論集』28 (2) : 95-6.
- 斎藤環, 1998, 『社会的ひきこもり——終わらない思春期』PHP.